

私にとっての富士雑感

(一)世界遺産登録決定の瞬間

2013年6月22日(水)水島でI氏が主催するBOOK 寄付のサロン開設準備を手伝っての帰路車中のラジオ番組が一時中断し臨時ニュースが流れてきた。三保松原も各国の強い要請発言で登録に含まれるとアナウンサーの声も上ずって私には聞こえた。運転中の私も何かしらの衝動に駆られ「ヤッター」と叫んでいた。久々の感動!こんなことは最近珍しい。

事前報道によると「三保松原は難しそう。それでも日本は最後まで訴え続ける」との姿勢も知っていたので、決定の時間が遅れた原因が、各国の協賛のスピーチが続き夕方4時過ぎにやっと決定したとの報道である。

(二)富士山への人生一番の感動は

東京に出た昭和39年はオリンピックの年であり、建設ラッシュで湧き上がり新入社員の我々も一人前の社員と同じように、残業や時には現場での寝泊りが続いた。たしか翌年の40年慰労の意味も含め先輩社員と二人で、八丈島のNHK中継所炭酸ガス消火装置の仕事で、生まれて初めてフレンドシップ(プロペラ機)で羽田を発ち、帰路は八丈島空港から八丈富士を横に眺めつつ離陸、高度を上げると、水平線の彼方に富士山だけが「ぼつん」と見えた。

北上に従って段々とその雄姿が大きくなり房総半島の上空で進路を変える頃には、富士の裾野だけでなく、武蔵野・都心のビル街が旋回し、直下には習志野台地(千葉北部一帯)が大きく展開し、違った角度での富士山を感動の眼差しで脳裏に残った。

幕末から維新に翔けて海外に雄飛した先人も、水平線の富士の山を見たときの感動はさもあらんと連想しつつ、新妻に椿の実(妻は蘇鉄の実と記憶)で作ったペンダントを握り締めたあの頃が懐かしい。あれから半世紀がたった。

(三)富士見町と名の付く地名

私が結婚し長男を育て始めた昭和40年代の半ばの東京は、公害がひどく、最近の北京の状況と全く同じで、東京から富士山が眺められるのは年末年始で工場が休みになっている正月三ヶ日ぐらいで、新聞に写真が大きく掲載される、そんな時代であった。

当時都心から離れた郊外の住宅公団(松戸市常盤平団地)で緑の多い環境で子育てをしているつもりであったが、広島に転勤になり長男の喘息がびたりと止まった時に、改めて東京の公害の酷(ひど)さを実感した。隅田川の悪臭も凄かった。河畔にあった日本石油の貯蔵所の防災工事のため電線の埋設工事で地中を掘っていると汚泥がひどく、匂いが消えないので新品の作業服を全員に支給したそんな環境の時代を経て今日がある。

余談が過ぎた本題に戻る。本来江戸の昔から都心で富士山を見ることは多かった。その証しに「富士見町」との地名が多く残っている。勤務地の西新宿界限にも存在した。当時は先に述べたようにスモッグが酷く田舎者の私には此処で富士が見えるとは信じ難い実感を記憶している。昨今ではNHK本部のスタジオから時に映し出される富士山の映像が往時と比べ格段に良くなっている。

富士山を崇める気持ちは今も昔も変わらない、特に「見」の付く地名は「此処から富士が見えますよ」と少し誇らしげに命名した当時の気持ちが伝わり、正に名が態を現している。全国に49を数える「富士見町」が存在するそうだ。

(四)各地に自慢の富士山が存在する

私は転勤と仕事の関係で各地を訪問し、時に家族と移住した。私の知る讃岐富士は香川にあり琴平宮からの遠望も小さい富士だが記憶に残る。薩摩富士は人気一番(2008.20.7.9朝日)とのことであるが、私は特攻隊の苦渋の話を観光案内のガイドさんから聞き、涙したそのことが焼きついている。

私が生まれ育った鳥取倉吉＝伯耆（ほうき）国の国府があつて、本来は霊峰大山（だいせん）を拝む正面のはずだが、別称は伯耆富士と称して、富士の形は大山の西側から眺めるのが良い。残念ながら国府側からは裏大山の剣ヶ峰（1729m危険なので立ち入り禁止）が連なっている。

今住んでいる岡山にも備前富士があり、正式な山の名称は芥子（けしご）山（標高 233m）で近年開発が進み江戸中期に干拓されたが、今では良好な住宅地になり、「富士見町」と命名され住民に愛されている。吉井川と旭川（共に 1 級河川）を結ぶ倉安川が 1679 年に池田光政の命で津田永忠が約 20 Km の人工の運河を作った。スエズ運河よりも 190 年も昔に閘門（こうもん）式水路を作り高瀬舟で物資の往来と農業用水の供給を行った。完成時に池田光政公が高瀬舟で通った故事が残っている。

参勤交代の殿様を慰労するために、山頂に蕨（むしろ）を敷き占めて備前富士を楽しんで、いただいた粹人がいて、江戸で語り継がれたそうである。真意のほどは判らないが 32 万石の大藩であっても、質素儉約が藩風で江戸人は備前風として身なりだけで里が判った時代、下級武士が故郷の備前富士を誇りにしたことであろう。そんな声が聞こえて来そうである。我家でも遠望できるので、仲間とのウオーク時には必ず、この話を洒落ごとの一つに加えさせて戴いている。

（四）鳥取の伯耆富士が出雲富士として 鳥根の松江に取られそう

先にも触れたが鳥取県には、大山と砂丘が国立公園になっていて、小さな県としては唯一誇れるとして自負しながら育ってきたが、都会に出ると誰も大山（だいせん）と呼んでくれないで「おおやま」と呼ばれ、別称の伯耆（ほうき）富士はルビが付かなければ判ってもらえない。

茶道の不昧（ふまい）流の祖であり、出雲松江藩主松平不昧公は、江戸中期の文化人＝風流人として全国に名が知れた著名な殿様でした。

今でも出雲や鳥取の米子地方では市民レベルでお茶と和菓子の文化が定着しています。緑茶を「だんだん・・・」との奨めの西言葉（出雲弁）が懐かしい。

その出雲の殿様がお城（松江城）から日の出を迎える東方を眺めると秀峰大山（伯耆富士）が正面に大きく見えます。



松江城からの伯耆富士

残念ながら鳥取の池田の殿様は砂丘まで行けば辛うじて 100Km 先の大山が見えますがとても条件が揃わないと見えないようです。



鳥取砂丘からの大山

ましてや見えるのは富士ではなく大山なのです。江戸に出て一流の文化人である不昧公が自分の城で眺める富士が日本一と称したかは定かではありませんが、出雲の殿様が見ていたのは、本当は伯耆富士でした。転じて江戸人に出雲富士として知られることになります。

今でも県下名門の県立松江北高の校歌には「仰げば正し出雲富士・・・」と歌われているようです。

これも余談ですが隣接する岡山県境には、蒜山（ひるぜん）三座があります。今では岡山第一の観光地で、全国からお客が集まっています。蒜山の半分は鳥取の筈ですがこれも 100%岡山に奪われています。大山は完全に鳥取の山で出雲（鳥根）に取られているとしたら出身者として残念なことです。

2013. 25. 6. 27